

# 「誰かの靴を履いてみること」

湘南白百合学園中学校 3年 あおやぎ 青柳 ましろ 真白

自粛期間中に読んだブレイディみかこ著「ぼくはイエローでホワイトでちょっとブルー」にこの言葉が出てきた。著者の息子が中学一年生で、シティズンシップ・エデュケーション（日本で言う公民のような授業）の「エンパシーとは何か?」という問いの答えに「自分で誰かの靴を履いてみる」と解答したのだ。エンパシーとは「相手の立場に立って考えてみる」という意味である。

時を同じくして、全世界コロナ禍の6月にアメリカで白人の警察官が罪のない男性の首を膝で押さえつけて窒息死させた事件が起こり、大規模なデモがしばらく続いていた。そして、つい先日も黒人男性が白人警察官に至近距離で背中に何発も発砲され、一命はとりとめたものの半身不随になってしまったというニュースを見た。

日本に住んでいると人種差別ということについて、いまひとつピンとこない。しかし、日本でもアイヌ民族や琉球民族への迫害や、部落差別などがある。ないのではなく、目を向けていないのだ。何事もまず問題があることを認識することが必要だ。誰も教えてくれないのではない、知らないということで逃げられる問題はない。知ることが、まず「誰かの靴を履いてみる」の第一歩になる。

私は中学二年生の夏休みにオーストラリアに2週間ほど研修旅行に行った。その際に、黒人の友達が私の肌を見て「あなたの肌は白くてきれいで羨ましい」と言った。彼女たちの肌も私から見たらすごく美しかったので、「あなたの肌もとても美しく好き」と伝えた。今考えてみると、美白信仰があるのかも知れない、と思った。あるジャーナリストがアフリカでは美白信仰があり、肌が他の人よりも白いと幸せな人生を送れる、と多くの人たちが美白クリームを使用して、より白くなるうとしている。と記事にしていたのを思い出した。

この美白信仰を「誰かの靴を履いてみる」視点で見ると、色の黒い自分たちを誇りに思えない、恥ずかし

い、認めないということだろうか。目に見えていることが大切ではなく、目に見えないことこそ大切なことなのに。

多様性を認めようと叫ばれてる昨今、みんな違ってみんないいということを全世界が受け入れなければ根本的な問題は解決しない。フラットで差別のない時代は私たち世代が担って作っていくべきだ。ブレイディみかこさんは著書の中で、「エンパシー」と「シンパシー」の違いについて触れている。エンパシーは自分と違う理念や信仰を持つ人や、別にかわいそうとは思えない立場の人々が何を考えているのだろうと想像する力のことだ。一方、シンパシーはかわいそうな立場の人や問題を抱えた人、自分と似たような意見を持っている人に対して人間が抱く感情で、自分で努力をしなくても自然に出来るものだ、と定義しており、私のお腹にすんと落ちた。

想像する力=エンパシーを持ち合わせて、「誰かの靴を履いてみる」をまずは習慣化させたい。